

社會勞働研究

第30卷 第1・2号 1983

《論 說》

社会学部創設30周年記念講演会

およびセミナーの報告

——コルナイ博士を迎えて——……………盛田 常夫

講演

現代経済学からみたコルナイの世界……………宇 沢 弘 文

「世界資本主義」的現代資本主義論……………石 垣 今朝吉

国際機構における労働の人間化政策

——ILOの場合——……………嶺 学

相互承認と物象化(3)

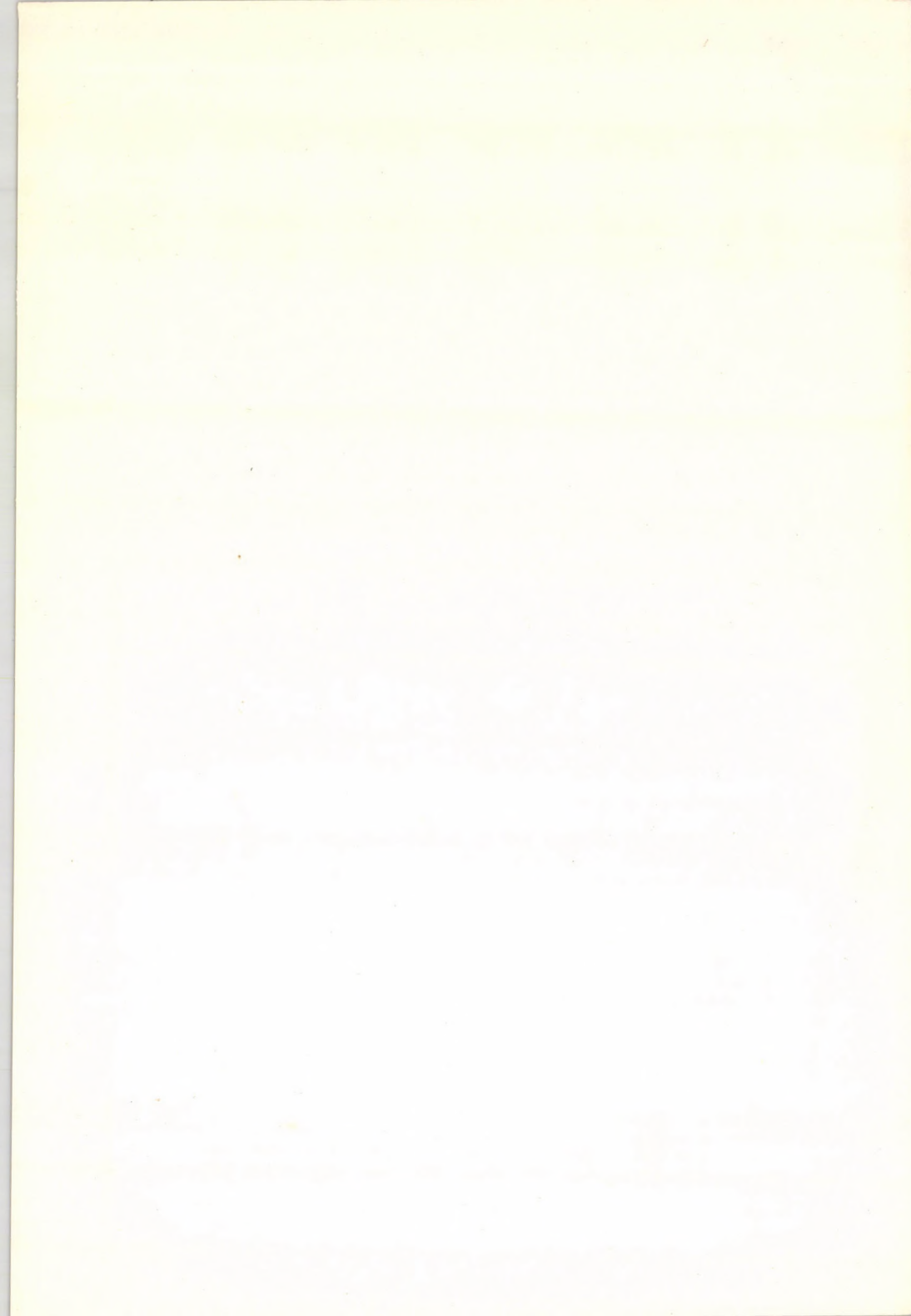
——初期ヘーゲルの社会理論——……………寿 福 真 美

熱延工場の合理化について……………公 文 溥

行政上の即時強制における憲法論……………奥 田 劍志郎

Convergence Theory and Historical Reality……………János Kornai

法政大学社会学部学会



社会労働研究

第30巻 第1・2号 (通巻第95・96号)

目 次

《論 説》

- 社会学部創設30周年記念講演会およびセミナーの報告
——コルナイ博士を迎えて——……………盛 田 常 夫 (1)
- 講演 現代経済学からみたコルナイの世界……………宇 沢 弘 文 (7)
- 「世界資本主義」的現代資本主義論……………石 垣 今 朝 吉 (15)
- 国際機構における労働の人間化政策
—— I L O の場合——……………嶺 学 (43)
- 相互承認と物象化(3)
——初期ヘーゲルの社会理論——……………寿 福 真 美 (69)
- 熱延工場の合理化について……………公 文 溥 (101)
- 行政上の即時強制における憲法論……………奥 田 劍 志 郎 (149)
- Convergence-Theory and Historical Reality; Twenty-One Years
after Tinbergen's Article …………… János Kornai (181)

講演

現代経済学からみたコルナイの世界

宇沢弘文

「現代経済学からみたコルナイの世界」というテーマで、コルナイ・ヤーノシュのご紹介を兼ねて、教授のお仕事
が現代の経済学研究の観点からどういう意味を持っているのかということをお話したいと思います。コルナイ先
生はプロフィールにもございますように数多くの書物を書かれており、しかもその一つ一つが非常に大部の、そして
難解な書物であって、その全体像を私がお話するのは、とても力の及ぶところではないわけで、その
点をまずお断りしたいと思います。そこで私は、現代経済学、主として私の専門の近代経済学というふうに言ったほ
うがいいと思いますが、の一人の研究者として見た場合に、コルナイ教授の仕事はどういう意味を持っているのかと
いう、かなり限られた観点からお話したいと思います。

コルナイ教授はハンガリー出身の経済学者でいらっしゃるわけですが、ハンガリーは有名な経済学者を何人も生み
出した国であります。ポラーニ、フォン・ノイマン。フォン・ノイマンはもちろん数学者ですが、経済学にも大きな
貢献をしています。それから、ニコラス・カルドア、シトフスキーというように、現代の世界の経済学の指導的立場
に立っている方々が、ハンガリー出身の経済学者であるわけです。

ただし、その人たちはほとんどハンガリーを出て、イギリスとかアメリカで活躍されたわけですが、コルナイ教授は、ハンガリーでハンガリーの社会主義の経済システムの策定およびその理論的分析ということに全力を注いで仕事をされている。つまり、ハンガリーの現実的な立場から大きな仕事をされているということとです。このことにつきましては、私はとても語ることはできないわけですが、コルナイ教授の仕事は、一見、制度的にもいろいろ違った面を持つ日本で経済学を勉強している私たちにとっても、非常に大きな意味があるということをまず強調したいと思います。

現在、近代経済学、非マルクス主義経済学というふうに言うべきでしょうか、がどういふ立場に置かれているのかということ、まず最初に簡単にお話しして、コルナイ教授の仕事の位置づけをその関連でしてみたいと思います。経済学の発展の歴史を眺めますと、二つの局面が絶えず交錯して現れていると言えます。一つは経済理論の展開であり、もうひとつは制度的、あるいは実証的研究であって、この二つが絶えずサイクルを描きながら経済学の歴史を形づくっているわけです。

一方の理論といいますと、現在、もつとも大きな流れとして経済学の理論を形成しているのは、レオン・ワルラスの一般均衡理論に発する均衡分析、あるいは新古典派的な経済理論であります。これはレオン・ワルラスの純粹経済学に始まって、一九六〇年代にアローとかデブルーたちの仕事を通じて、数学的な定式化という観点からも、非常に完成度の高い理論モデルとして形成されていったのですが、この経済学的内容を考えてみますと、ある意味で純粹な意味における市場経済制度を想定して、そこでの経済循環の運動法則を解明する。そのために、高度な数学的なテクニークを使って市場均衡の意味、あるいはさまざまな経済政策の効果を分析していくというのが、新古典派の経

濟理論であるわけです。

その基本的前提としていくつかの特徴があります。これはコルナイ教授が *Anti-Equilibrium* という書物で一般均衡理論の批判的な検討をされているのですが、その主なものを拾ってみますと、たとえば静態性です。資本主義の経済、あるいは一般に現実の経済は絶えず変動しながら、そしてその不均衡を伴いながら動いていく。そして、時間の経過を伴ってさまざまな局面を経ていくわけですが、その時間的な側面を捨てて、いわば瞬間写真を撮るといったふうな静態的な分析方法というのが第一にあります。

ただし、その前提として、考察の対象としている、たとえば資本主義的市場経済制度というような、制度的な前提条件は変わらない、ということが仮定されている。人々がさまざまな行動をし、さまざまな変化が起きていても、その前提になっている制度的な条件は変わらない。そして、制度的条件が所与とされたときに、実際の経済循環のメカニズムはどうなるかということを分析していくというのが、もうひとつの特徴であります。

それから、経済社会、あるいは市場経済を構成する一人一人の構成員の持っている価値基準、もっと大げさに言うと人間的な特質はそれもまた不変であって、どのような状況に置かれても、絶えず自らにとって最適な行動をするという合理的な行動仮説ということも、もうひとつの特徴としてあります。

そのほか、経済活動、あるいは生産活動に必要な生産要素につきましても、必要ならば、いろいろなかたちでその形態や比率を変えることができて、さまざまな用途にそれを向けることができるという可塑性というような条件も置かれています。そして、その市場は絶えず均衡している。つまり、すべての財貨、サービスについて、需要と供給が等しくなるような状態が常に実現しているというのが、ワルラスに始まる一般均衡理論の立場であり、それが現在の

経済理論の基礎を成しています。

これに対し、制度的、あるいは実証的な分析という、もうひとつの経済学の流れを見てみますと、こちらのほうは、そういった制度的な条件が実は不変ではなくて、人々の経済的な活動とか、新しい組織とか、新しい技術の展開に伴って変わっていく。それも偶発的に変わるのではなくて、ある種の法則性を持ちながら経済制度が変化していく。その変化の論理を探ろうという、広い意味の制度学派的な考え方というのが、現代の経済学の底流として存在するわけです。

もともとこの制度学派的な考え方というのは、十九世紀の終り頃から二十世紀にかけて活躍したアメリカのソースタン・ヴェブレンの考え方がいちばん基礎にあるわけです。ソースタン・ヴェブレンは、ドイツの歴史学派の影響を受けながら、制度の進化論的分析こそ、経済学が対象としなければいけないものであるということを強調したわけですが、コルナイ教授のお仕事、とくに「不足の経済学 (Economics of Shortage)」の段階では、経済的な制度がどうかたちで変革していくのか、あるいは、さらに望ましい安定的な経済的な制度はどうかという特徴を持っているのかという、制度の変化についての理論がここで展開されています。

これはいま言いました制度学派的な流れです。つまり、ヴェブレンの考え方は、一八九〇年前後にヴェブレンが書いた「経済学は進化論的科学的たりうるか」という有名な論文の中で先ほど述べたような意味における新古典流の経済理論を批判して、その制度と人間の行動との相関関係とか、その制度がどういう論理によって変わっていく、新しい制度がつくられていくのかとか、それが人々の行動にどういう影響を与えていくのかということを分析する、広い意味における進化論的な科学として経済学は存在するのだということを強調したものです。

このような視点から、コルナイ教授のお仕事を考えてみますと、制度学派的な考え方、制度の進化論的分析を、一般均衡理論の展開の過程で開発されていった、すぐれて分析的なテクニクを使って研究を展開されているというのが、その基本的な特徴ではないかと思われまふ。

この一般均衡理論を基礎にした新古典派理論は、実は現在、アメリカをはじめ世界の多くの大学で支配的な地位を占めています。それはさまざまな変形をもって展開されているわけですが、その代表的ものとしては、合理的期待形成仮説(Rational Expectations Hypothesis)の考え方があります。あまり聞き慣れない言葉ですが、これは一九六〇年代の終わりからアメリカの大学を中心として、非常に大きな力を持ちはじめた考え方で、アメリカの大学で現在作成されている経済学理論の博士論文の八〇%が、何らかの意味でこの合理的期待形成仮説と関連しているという推定する人もいます。

これはどういう考え方かといいますと、人間の行動がさまざまな制度的な制約条件とは無関係に、ある意味で絶對的な合理性を追求して人間の行動が選択されていて、しかも、個々人が現在だけでなく将来に起こるさまざまな不確定な事象に対して、正確にその不確定さ、あるいは確率分布を知っていて、各人にとって最も望ましいと思われるような選択をするというものです。

これを一般均衡理論の中に組み込んでいくと、最近、アメリカで流行しているサプライサイドの経済学、つまり、政府の取る経済政策は必ず人々がその効果を正確に読み取り、それを相殺するようなかたちで対応していくから、政府がどういふ経済政策を取っても、それは無効になってしまうというような考え方とか、あるいはもっと俗流的な私たちでは、平均税率を下げれば、労働者はもっと働くから所得が増え、税収が増えるというラフアアの定理、これ

もまたある意味の合理的期待形成仮説の流れの中で展開されている考え方であります。

これは資本主義的な市場経済制度を通じて資本資源の最適配分が可能になるという古くからの新古典派の命題が、命題としてでなく、ある意味では理論前提として仮定して理論が組み立てられていると言ってもいいわけですが、このような極端な私たちの理論分析が展開されている。それに対し、制度学派的な制度と人々の行動とのインタラクション、そして、その制度の進化の過程という分析視点は完全に影をひそめてしまっている。

これが現在の経済学の状況であると言ってもいいと思うのですが、その中で、コルナイ教授は、一方では一般均衡理論のもっとも先端的な業績を踏まえながら、他方では、ハンガリーにおける社会主義制度の建設過程に直接かかわられたという体験を踏まえて、かつてヴェブレレンが夢見た制度の進化論的分析をすぐれて理論的かつ分析的な枠組の中で展開されると言えるのではないかと思います。

アメリカの大学だけでなく、日本でも、合理的期待形成仮説によって代表されるような現在の均衡分析のあり方に対して、懐疑的な気持を持っている研究者や学生が多いわけですが、そうかといって、それに代わって新しい経済分析の枠組を展開するということが非常に困難だというのが現状であるとき、その中でコルナイ教授のお仕事というのは、先駆者的な意味を持っていると思います。

今からもう十年以上になりますが、一九七〇年にアメリカで経済学会がありました。そこでジョウン・ロビンソンが有名な講演をしました。“Second Crisis in Economic Theory (経済学の第二の危機)”です。二十世紀の経済学の第一の危機は一九三〇年代に起きた。当時、支配的であった新古典派の経済理論が大恐慌を前にして破綻していき、それに対して新しい理論の枠組は展開されずに来た。これが第一の危機であるが、この第一の危機は、ケインズの一

般理論、あるいはケインズ経済学の出現によって解決した。

ところが、それに対して、一九六〇年代から七〇年代にかけて経済学の第二の危機が起きていて、それはケインズ経済学もすでに妥当しない状況が現実には起きているが、それに代わるべき新しい理論の枠組は作られていない。そのような意味で経済学の第二の危機であるということを、ジョウン・ロビンソンは強調したのです。

そのジョウン・ロビンソンの講演のあと、ケインズ以前、すなわち第一の危機以前の古典派の経済学が支配的になりつつある現状で、コルナイ教授の一連のお仕事、とくに「不足の経済学」は、ジョウン・ロビンソンの言う第二の危機を解決するひとつの重要なカギを、われわれに提供してくれているのではないかと私は思います。

以上、簡単ですが経済学を研究し、新しい分析的な枠組を求めている人間の一人として、コルナイ教授のお仕事をどういふふうにかと考えるかということをお話しすることで、ご紹介に代えたいと思います。

の中心となるのは、その時々の政治情勢に依りて異なることである。以下、その大要を述べたい。

政治小説の発展を論ずるに當り、第一にその時代背景を考察する必要がある。政治小説は、その時代の政治情勢を反映し、その時々の政治情勢を論ずるものである。政治小説は、その時代の政治情勢を反映し、その時々の政治情勢を論ずるものである。

政治小説の発展を論ずるに當り、第一にその時代背景を考察する必要がある。政治小説は、その時代の政治情勢を反映し、その時々の政治情勢を論ずるものである。政治小説は、その時代の政治情勢を反映し、その時々の政治情勢を論ずるものである。

政治小説の発展を論ずるに當り、第一にその時代背景を考察する必要がある。政治小説は、その時代の政治情勢を反映し、その時々の政治情勢を論ずるものである。政治小説は、その時代の政治情勢を反映し、その時々の政治情勢を論ずるものである。